

ALS患者ら強い憤り

嘱託殺人

難病の筋萎縮性側索硬化症(ALS)の女性患者(当時57歳)を殺害したとして医師2人が京都府警に嘱託殺人容疑で逮捕された事件で、ALSの患者らから批判の声が相次いでいる。女性は強く死を望んでいたとされ、ネット上には事件を「安楽死」と結びつけるような意見もあるが、患者らは「困難を抱えた人が生きる心持の否定につながる」と強い憤りを抱いている。



事件に強いショックを受けたALS患者(提供写真)

筋萎縮性側索硬化症(ALS) 体を動かすための神経に異常が生じ、全身の筋肉が徐々に衰える進行性の難病。体の感覚や視力や聴力、内臓機能などは保たれる。最終的に呼吸

困難になり、人工呼吸器を使わなければ生存期間は2~5年とされるが、個人差がある。原因は不明で、根本的な治療法は見つかっていない。国内の患者数は9805人(2018年度末時点)。

「生きることを否定につながる」

■「なぜ医師が…」

「なぜ人を救うはずの医師が、死の手助けをするのか」。ALS患者で、支援団体「WITH ALS」(東京)の代表を務める武藤将嗣さん(93)は事件に、やり場のない怒りを覚えた。事件では、いずれも医師の大久保倫一(42)、山本直樹(48)両容疑者が昨年11月30日、京都市の女性宅で、女性の依頼を受けて薬物を投与し、殺害したとして、今月23日に逮捕された。2人は主治医ではなく、SNSで女性と知り合ったとみ

「治る希望を」励まされ

女性と交流の患者

女性とツイッターでやりとりしてきた長崎県大村市の平坂貴さん(48)が取材に応じ、女性への思いを明かした。

平坂さんは2年前にALSと診断され、車いすで生活しており、目の動きで操作するパソコンを使って意識疎通している。

まず伝えたことである。女性からは「なぜかほかの患者さんには治る希望を持ってほしい。勝手なものですわ」と励まされたという。

平坂さんが女性のつぶやきを見つけたのは昨年2月。平坂さんからメッセージを送り、それ以来、ツイッターで交流を重ねてきた。

女性の投稿が途絶えた昨年12月以降、「もうつぶやかないのですか」とメッセージを送ってきた。

事件2か月前の昨年9月、女性に「自分の未来と重ねてつぶやきを眺んでい

「彼女のよさな人がいることを、多くの人に知ってほしい」。今はそう願ひ、女性を静かに悼んでいる。

られている。

女性が、ツイッターやブログで、「安楽死を望む思いを繰り返し発信していたことからネット上では死の権利を認めるべきだ」といった声も相次いでいる。

2006年にALSを死に症し、人工呼吸器を装着する岡部宏生さん(62)は、今回の事件について、10年に相模原市の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で入所者ら45人が殺傷された事件と根は同じと考

「SNSを通じてもっとすばらしい人たちと出会い、未来への希望を持ってほしい」と悔やみつつ、事件をきっかけに「安楽死」の議論を進めるような風潮に危機感を抱いている。

殺人罪などで死刑判決が確定した植松聖死刑囚(30)は、「障害者なんていなくない」と暴発的な発言を繰り返していた。岡部さんも、女性のように「死にたい」と考

「倫理背く行為」

ALS協会

今回の嘱託殺人事件で、患者や家族らでつくる日本ALS協会(東京)は27日、患者でもある嘱託患者会会長名で「医療倫理に背く行為で二度とあってはならない」とのコメントを出した。「患者さんが死にたいと関係者に吐露し、依頼することは珍しいことではないが、患者さんの思いや行為を非難することはできない」とした上で、「ALSの進行に対して医療者や福祉関係、支援者が当事者に

死になくなるのは仕方がない。しかし、逮捕された医師が、もし女性のためと思っているのなら、植松死刑囚と同じで、尊大な思考」と反発する。終末期の緩和ケアに携わる神戸市の内科医・新城拓也さん(49)も、今回の嘱託殺人事件は「安楽死ではない」と語気を強めた。

「死にたい気持ちと、生きたい気持ちと同時に存在する人間。患者の生き方になるのが医師」と語り、強い支持していくことが必要」と求めた。同日、「(医師の行為は)到底容認できない」とする見解を発表した。過去の判決で示された、積極的安楽死を容認する要件を満たしておらず、「苦痛の救済方法の話し合いが、本人と医療者の間で行われた形跡がない」と批判。同協会は、十分な緩和ケアを受けて自然に迎える死を尊厳死と定義し、安楽死には反対の立場で、「尊厳死と安楽死をはっきりと区別してほしい」とも訴えた。